

Mon Nara

Numéro309 Association Franco-Japonaise de Nara 奈良日仏協会



OCT. 2025 10月号

秋の教養講座 2025

講演「ベルサイユと私 — そして今 ソレンヌと私 —」

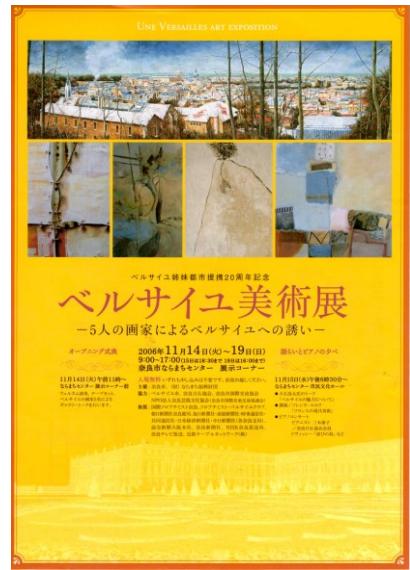
11月23日（日・祝）生駒市芸術会館 美楽来 にて開催

講師 西崎美也子（書道家・奈良日仏協会会員）

私とソレンヌ・エロワさんとの出逢いは 2006 年に遡ります。その頃私は奈良市の文化振興課で文化政策に携わる仕事をしていましたが、その年 4 月、機構改革で国際交流の仕事が秘書課から文化振興課に移管されました。奈良市はフランス・ベルサイユ市と姉妹都市提携を結んでいますが、2006 年は提携 20 周年に当たる年で、その記念事業としてベルサイユからアーティストを招き、「ベルサイユ美術展」と銘打って姉妹都市ベルサイユを紹介する展覧会が計画されていました。私は当時文化振興係長で、この展覧会の企画を任せられました。私は国を跨いだ仕事などしたことはなかったのですが、初めて全面的に任せられたプロジェクトでしたので、大いに奮闘してこの仕事に取り組みました。ソレンヌさんはその時来寧したアーティストの一人でした。その翌年、彼らが開催した奈良を紹介する展覧会のため、私がベルサイユを訪れた時、彼女は夫の実家に私を泊めるよう取り計らってくれました。このあたりのことは、講座で詳しくお話しさせていただきます。以来、何度かの行き來、クリスマスカードのやり取り、折々の近況を伝えるメールなどで、長いお付き合いが続いています。

普通、このような仕事がきっかけで生まれた関係は、仕事を辞めれば途絶えてしまうのですが、私とソレンヌは相性が良かったのか、仕事を離れた人と人の関係が続いているのです。行政の国際交流は首長の考え方で左右されやすく、同じ熱量で続けていくのは難しいのが現状です。両方を経験した私は、やはり最終的には眞の国際交流には人ととの心の関係が大切だと考えています。

今回はソレンヌと私が OFFICIAL な関係から PRIVATE な関係に至る経緯をお話しさせていただきます。教養講座に相応しい内容なのか少し心配ですが、気楽にお聞きください。



日時：2025年11月23日（日・祝）**主催**：奈良日仏協会

会場：講演会 10:00～12:00 生駒市立芸術会館美楽来セミナー室2 **参加費**：会員 300 円、一般 800 円
懇親会 12:30～14:30 イタリア料理「トヨジタリーノ」（大皿料理＆ハウスワイン他飲み放題）

生駒市元町2丁目1-23 tel. 0743-73-0404 **参加費**：会員 4,500 円、一般 5,000 円（先着 20 名）

申込：メール sugitani@kcn.jp (杉谷) tel 090-6322-0672 (杉谷) fax 0742-62-1741 (三木)

締切：講演会 11 月 22 日（土）、懇親会 11 月 19 日（水）。懇親会にいったん申し込み後に欠席の場合、11 月 19 日（水）までに懇親会幹事 090-6322-0672 (杉谷) に連絡。連絡なしに欠席の場合は、後日参加費を徴収させて頂きます。※詳しくは本号同封のチラシをご覧ください。

第66回 奈良日仏シネクラブ例会『冒険者たち』(6/29)

アラン・ドロン追悼特集第2回は、1993年の当協会発足時にシネクラブやフランス・アラカルトの運営に尽力してくださった橋本克己さん（字幕翻訳家）をプレゼンターに迎えて、30年前に取り上げた作品を再び紹介していました。ドロンは昨年8月に88歳で亡くなりましたが、スクリーン上ではいつまでも唯一無二の俳優として輝き続けています。様々な映画監督のもとで様々な役柄を演じてきた彼には多面的な表情があり、つかみどころのなさも魅力のひとつかもしれません。今回は、『冒険者たち』の撮影現場となったエクス島にも訪れた橋本さんが、例会後、映画と原作小説の関係について考察してくださいましたので、以下に掲載いたします。（淺井直子）



『冒険者たち』(1967) はジョゼ・ジョヴァンニの小説に基づいている。言うまでもなく映画と小説やマンガは表現方法が異なり、ある意味で原作と較べるのは無意味かもしれない。とはいっても、例え気に入った小説が映画化されると知つて映画を見に行く人も多いだろうし、逆に映画が気に入り原作を読んでみたいと思うことも多いだろう。僕の場合は読んでみたいとは思つても実際に読むことはまずない。読んだと確実に思い出せるのは『リトル・ロマンス』(1978)『ディーバ』(1981) タイ映画『ホームステイ』(2018) ぐらいである。『冒険者たち』の原作については、例会の参加者にはすでにメールでネット情報を紹介したが、やはり気になるので、原作小説を読んでみた。

映画トップのクレジットを見ると、シナリオとして原作者のジョヴァンニが3人のトップ、台詞2人のトップ、さらにジョヴァンニの小説に着想を得た、と3回もジョヴァンニの名前がクレジットされ、ジョヴァンニ自身が映画化に深く関わっていると思われる。しかし原作（ハヤカワノヴェルズ、岡村孝一訳、1971年）を読んでみるとできあがった映画とは不可解なほど違っている。

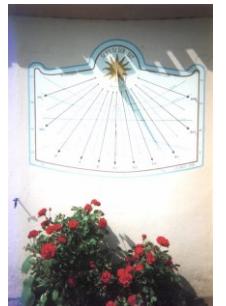
原作のタイトルは映画と同じ *Les Aventuriers* だが、邦訳小説は「冒険者たち」ではなく「生き残った者の掟」になっている。同じ67年にジョヴァンニ自身が再度映画化するが、恐らく映画化権を売却したから前作と同じタイトルは使えなかつたようだ。『冒険者たち』ではなく『生き残った者の掟 *La loi du survivant*』(1967) に替えられ、邦訳小説もこちらを採用している。さらにマヌーとローランの名前も変更され、知らずに見ればジョヴァンニ版映画の原作が「冒険者たち」と同じとは思わないだろう。

映画『冒険者たち』と原作小説で共通するのは、主人公2人の名前がマヌー（小説ではマニュ表記）とローランであること。“俺たちは海の底で金をめつけたんだ、引き揚げたんだよ”とわずか1行出るだけで、映画の中心になる《冒険》はまったく登場しない。

小説の冒頭では犯罪仲間だったが事故で死んだロレントの遺体を、故郷コルシカの墓地に埋葬するためヨットで運んで来る。ちなみにマヌーもローランもコルシカ人で舞台の9割以上がコルシカである。ロレントのいとこフランソワーズの息子がロレントとソックリだったので、映画と同じように1億5000万フランを将来受け取れるように手配する。つまり映画のレティシアがロレントにあたるが小説では名前だけで、ほとんど登場しない。それどころかローランすらほとんど登場せず、マヌー1人の物語である。そして詳細は省略するがコルシカの非合法の娼館で出会ったエレーヌを娼館から助け出す…。

ジョヴァンニ自身のことも不可解だが、例えば小説の訳者解説ではレジスタンスに参加、戦後暗黒街に入りパリのサンテ監獄に入る、とあるがウィキペディアではファシスト党に属しナチスの協力者だったと正反対の記述になつてゐる。小説のエレーヌはナチスのコラボだったため娼館に閉じ込められている設定なので、ウィキのほうが正しいようだ。そして殺人など多くの犯罪に関与し死刑判決を受けるが恩赦で1956年に出所、暗黒街での経験をもとにギャング小説を書き出す。マヌーもローランも刑務所仲間で1958年の小説第一作の『穴』(ジャック・ベッケルが1960年に映画化) から登場し以後の小説にも何度も登場し、また実在の人物も登場する。

ジョヴァンニが『冒険者たち』に不満だったことは十分考えられるが、『冒険者たち』に積極的に関わり、ほぼ同時期に自分で撮り直すのも不可解ではある。もしかしたらジョヴァンニは『冒険者たち』のような《冒険》を前日譚として書くつもりだったかもしれません、アイデアとして監督のアンリコに提供したのかもしれない。そう考えれば《冒険》の登場しない小説のタイトルを《冒険者たち》としたことも納得できる。いずれにしろ、映画『冒険者たち』は見事に小説を換骨奪胎したと言えるだろう…。(橋本克己 当協会シネクラブ初代責任者)



橋本さん撮影写真（上から）

- 1) マヌーが要塞島に行くため小舟に乗る場所
- 2) 要塞島
- 3) ローランの家にあった日時計
- 4) サンテ刑務所入口

第 157 回フランス・アラカルト「フランス詩に泳ぐ魚たち」(9/7)

9月7日（日）、第157回フランス・アラカルトを生駒セイセイビルにおいて開催しました。参加者は15名。講師は、2023年4月に奈良女子大学文学部に専任講師（仏語・仏文学）として赴任された森田俊吾さんです。こんなに若いフランス・アラカルトの日本人講師を迎えるのは、何年ぶりのことでしょうか。森田さんの専門はフランス現代詩、2021年にパリ第三大学で博士号を取得されました。一般にはなじみの薄い現代詩を、音韻の分析と「魚」の主題のもとで、実にあざやかに説明して、聴衆の関心を惹きつけました。かつて詩の中で鳥たちがさえずり歌っていた時代は終焉して、今では魚が沈黙の歌を歌う時代になった、との結論は、私たちが生きている時代状況を的確に示すもののように思われました。森田さんは活発な質問にも丁寧に答えられて、充実した交流の時間を持つことができました。今後とも、奈良日仏協会に、その若々しい力を注いでいただきたいと希望します。（三野博司）

古典派やロマン派の音楽は好きですが、現代音楽が苦手な私は、現代詩に関する講義についていけるか不安でしたが、森田先生の楽しく、わかりやすい講義にほっとしました。また象徴派の詩と現代詩に共通する連続性、すなわち音楽的なリズムの存在を知り、大変勉強になりました。約40年前、パリ留学をしていた時、恩師の奥様から聴いた言葉が、私の頭に甦ってきました。昔、良家の娘さんは、結婚する前にコメディ・フランセーズの舞台俳優から、詩の朗読の仕方を習う、という話です。奥様からは、ジェラール・フィリップ朗読の『星の王子さま（サン=テグジュペリ）』のカセットテープを勧められ、購入しました。（角田 茂）

今回フランス・アラカルトに参加して、《問を立てる楽しみ》を味わいました。その問い合わせは『20世紀後半になると、それまで稀だった「魚」のイメージが現代詩に浮上してくるのは何故か？』というもの。ヒントとして、詩における「鳥」と「魚」のイメージが対比されます。鳥は歌い、翼を広げ、宙を舞う。故に、詩人が歌を仮託するイメージにもなり得た。一方で、魚は鳥のネガ（陰画）。言葉を持たず、詩人が歌を託すには遠い存在。そんな「魚」に光が当たられるようになったのは、二度の大戦の悲惨な体験を経て、美しい世界を鳥のように歌うことへの疑惑（=言語表現そのものに対する危機感）が生まれたからではないか？ それ故に、言葉を持たぬ魚たちの声なき声に耳を澄ますという不可能とも思える試みに詩人たちに向かわせたのではないか？ これが問い合わせへの答えとして提示された仮説でした。この仮説に至るまでの説明が鮮やかで、とても刺激を受けた1日でした。（寒河江康夫）



両大戦を経て世界が混沌とし、鳥の歌う美しい世界が疑わしくなった時、逆に魚が登場してきたということでした。「アウシュヴィッツ以後、詩を書くことは野蛮である」という言葉がありますが、それでも混迷のなかでも歌い続けるのが詩人の性であり、その詩の困難さが、現代詩の難しさにつながっているのかも知れません。（杉谷健治）



アポリネールの詩に「君の舌／水槽のなかの赤い魚／君の声の」という一節があります。口や舌を金魚鉢の赤い魚に見立てた比喩ですが、あえて「口（bouche）」ではなく「声（voix）」と書いたところに私は強く惹かれます。今回の講演では、戦後フランス詩における〈沈黙〉のテーマと魚のイメージを重ね合わせてお話をいたしました。魚は、鳥のように決して美しくは歌いませんが、その静けさゆえに、人に多くを語りかける存在でもあります。そうは言いつつも、もし会場の皆さまが本当に魚のように無反応だったらどうしよう、という不安もありました。けれども実際には、とても温かく迎え入れてくださり、興味深い質問やご意見も数多くいただけました。また、その後の懇親会での交流を通じて、奈良日仏協会の皆さまが、何よりもフランスの文化を心から楽しみ、愛していることが伝わってきました。こうした機会を頂けたことを感謝するとともに、フランス・アラカルトが今後も続いていくことを願っております。（森田俊吾）

日仏交流 150 周年記念行事（2008 年）と坂本前会長の思い出

この夏の坂本成彦前会長とのお別れは悲しいものでした。坂本さんが奈良日仏協会の会長に就任された時にお説いてくださいて、未熟な私でしたが理事の皆様のお力をお借りして、様々な活動のお手伝いをさせていただけたことは、私にとって貴重な時間でした。私はフランス語が全く話せなく、ただフランスが好きなだけで入会しました。

入会してすぐに、坂本さんより、フランス語が話せないと入会できないような雰囲気をなくして、フランスの音楽が好き、料理が好き、ワインが好き、そんな人にも入会してほしいから、気軽に参加してもらえるイベントをもっと開催していきたい、とのことで理事としてお手伝いさせていただきました。その最初の大きなイベントが日仏交流 150 周年記念行事でした。

坂本さんはお仕事柄、人脉が広く、すぐにシャンソン歌手のミッセル・フローさんにお演を依頼してくださいました。出演者が決まるとき、会場選びにかかりました。コンサートの規模を決めて、収容人数とコンサート後の交流会が出来る会場ということで、なら 100 年会館に赴き中ホールを予約し、後援を頂くために奈良市観光課、奈良県記者クラブへの広報と、様々なところへお願いに坂本さんとともに足を運びました。交流会の準備で、アルコール会社へのワイン提供依頼等にもご尽力くださいました。この時、ジャズコンサート等の運営をされた経験のある理事の樋口順一さんに坂本さんがお声をかけてくださいり、樋口さんがコンサートの舞台関係にご尽力くださいました。

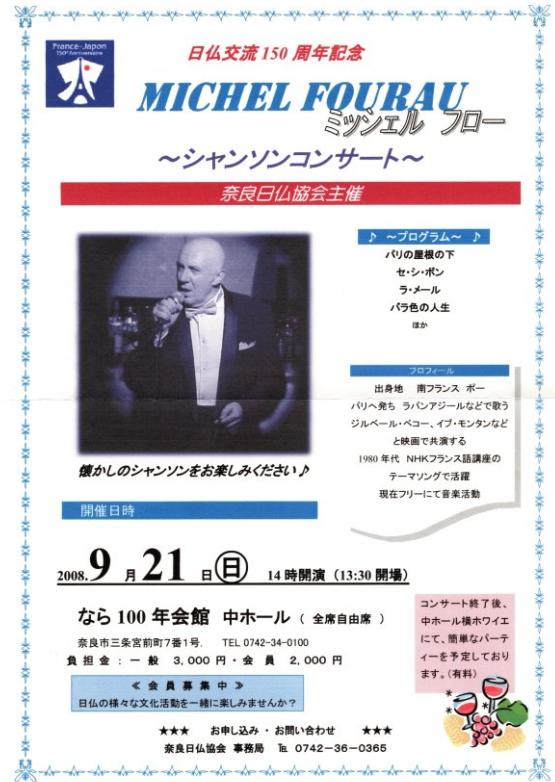
沢山の理事やそのご家族、会員の皆さん、関係各所の皆さんのお力のお陰で、日仏交流 150 周年の行事を無事に終えることが出来ました。それ以降も会員間の交流を深めたいという坂本さんのお気持ちを大切にして、会員の皆さんに様々な分野で気軽に参加してもらえるイベント開催のお手伝いをさせていただいたことは、今もいい思い出になっています。（中野愛弓）

当時は日仏協会の会計として、コンサートのチケットの管理をしておりました。理事のみなさまがチケットを捌くのにお骨折りくださいり、当日も朝早くから準備に集まってくださいました。そのおかげで、270 人の観客にミッセルさんの素晴らしい歌声とトークを届けられ、シャンソンを楽しむことができました。（中西ツヤ子）

坂本前会長から奈良日仏協会に入会を勧められた時にお話しいただいたことで記憶していることがあります。それは社会的貢献についてでした。企業が社会に貢献するのは当然ですが、企業に雇用されている従業員個人が、社外で地域において活動することを支援する仕組みも大切なのではないか。人生をより豊かに過ごすには、多様な選択が可能な社会の形成が求められるべきだという話でした。奈良日仏協会の社会的貢献のあり方、会員が満足する運営への配慮が如何にあるべきかなどを、前会長はお考えになっておられたように思います。（樋口順一）

私は坂本成彦前会長が会長に就任なさった 2008 年に理事として迎えて頂き、短期間ではありましたが、お手伝いさせて頂きました。たまたまその年が日仏友好 150 周年の年に当たっていた事もあって、奈良日仏協会の日仏交流 150 周年記念行事の企画と運営に携わりました。私が直接的に関わった主な行事は Michel Fourau 様のシャンソンコンサートと日仏活け花交流の二つでした。特にフランスの活け花グループには個人的なつながりがあったものですから、日仏協会の会員の方々に呼びかけ、ホームステイの受入れをして頂くなど大変ご協力を頂いたことは、今も楽しく懐かしい思い出となっております。坂本さんとはそれ以来親しくお付き合い頂いておりましたが、今年になってお亡くなりになったことは本当に残念でなりません。心からご冥福をお祈り致したいと思います。（大西 弘）

※奈良日仏協会で 2008 年から 2013 年まで会長を務め、当協会の発展に尽くされた坂本成彦さんが、7 月 29 日に逝去されました（享年 85 歳）。謹んでご冥福をお祈りいたします。（編集部）



中野さん作成のチラシ

フランス語との出会い、フランスの思い出

伏見孝将（ふしみ こうじょう）

今年の7月に入会しました。私とフランス語の出会いは大学時代にさかのぼります。一回生の第二外国語として学び、四回生のときにカルチャーセンターの講座で再び学びました。

カルチャーセンターの先生のお名前はガブリエルでした。祖先がマルティニーク出身で柔道黒帯、色が浅黒くがっしりした体格は黒い水牛のようで一見強面ですが、話し好きで冗談を言うのが大好きでした。大学で教員をされていたので教えるのもお上手で教育熱心な良い先生でした。クラスメートの方も、趣味が豊富で明るい方が多かったです。絵が大好きで自身で個展を開かれるマダム、海外旅行が大好きでいつも元気な呉服屋の娘さん、ワールドカップ・フランス大会に備えてフランス語を学ぶ会社員、スイス留学の前にフランス語を学ぶ小学生。いつも笑いがあふれて楽しい学びの場でした。

講座が始まって3か月ぐらい経った頃、授業の後、クラスメートのひとりとお茶をしました。そのとき、彼女が、宝石のデザインを学ぶために来年初めに渡仏することを知りました。それから週に1回、ふたりでフランス語の特訓をすることにしました。喫茶店でダイアローグや問題の出し合いで、年が明けて、彼女は渡仏し、私は特訓の甲斐あって仮検3級に合格しました。帰国後、彼女と結婚しました。

社会人になって5年経ち仕事にも慣れ、GWに夫婦でフランスに行きました。ガブリエルも休暇でブルゴーニュのディジョンに戻っているので、先生を訪ねることにしました。早朝パリに着き、空港リムジンバスをギャラリーラファイエットの前で下車しました。人気の少ない静かな通りの両側に、石造りの重厚な建物が目の届く限り並んでいます。どの建物も6階建てぐらいでずんぐりして、石の色が黒ずみ歴史を感じさせます。その落ち着いた佇まいの向こうに、薄青く澄んだ空がどこまでも広がっています。パリは、思い描いた通りの美しい街です。メトロに乗ってホテルに移動し荷物を預け、近くのリュクサンブル公園を散歩しました。色とりどりのバラが咲き乱れ、ミツバチやアブがブンブン飛び回っています。そして、沢山の方が散歩しています。ご高齢の方はベンチに座ってバラを眺めています。ここでは時間がゆるやかに流れているようです。一方、私たちは、急いで観光と買い物です。凱旋門とエッフェル塔に登り、ルーブル美術館とマルモッタン美術館を巡り、ブランドショップで買い物をし、雑貨店で雑貨とポスターを買い、カフェでお茶をし、老舗のショコラ屋さんでお土産を買うのに大忙しです。パリを発つ前日の夕方に、もう一度、リュクサンブル公園を散歩しました。やはり大勢の方が思い思いに過ごしています。朝にはいなかつた大勢の子供が楽しそうに走り回っています。日が落ちるにつれて、辺りは蜂蜜色に染まっています。その中を、ゆっくり散歩しました。

翌朝、TGVに乗ってディジョンへ向かいました。先生とは、駅で待ち合わせし、まずは朝市に行きました。小さなお店が所狭しと並んでいます。八百屋には色とりどりの野菜が売られ、肉屋では様々なお肉とソーセージが売られています。お客様とお店のやり取りがあちらこちらから聞こえています。活気があって樂しくなる市場です。鶏肉の丸焼き、サーモン、野菜を買いました。そして、『Gevrey-Chambertin』のシャトーに移動し、ディナー用のワインを一本買いました。市内観光の後、先生のご自宅でディナーです。買って来た鶏肉は、薄く切ってマスタードを付けて食べました。私達夫婦が先生のご自宅で食事をする機会はめったにないので、サーモンは各自がソテーしてそれを三等分して分け合うことにしました。お互い気心が知れていますので、よく話し、よく食べ、よく飲み、心に残るディナーでした。

このようにフランス語にまつわる思い出は美しく楽しいものばかりです。日常の忙しさの中で当時のことを忘れておりましたが、書いているうちに鮮明に思い出し、とても懐かしく感じました。これから奈良日仏協会の皆様とも仲良くさせていただきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。



シャルル・トレネの『La mer』は簡潔な歌詞と穏やかな旋律で海の美と癒しを描いて、大好きな歌です。朗らかで洒落た歌声も大好きです。

再訪日、インスピレーション、再会

ソレンヌ・エロワ

Après notre échange entre les villes de Versailles et de Nara il y a 18 ans, je rêvais découvrir la campagne et des racines profondes du Japon. Cette année, je suis revenue au Japon pour la première fois depuis des années et j'ai visité Kanazawa, Gokayama, Naoshima, Hiroshima et Kyoto. Voici mes impressions sur ce voyage.

À Kanazawa les arbres majestueux et leurs soutènements sont magnifiques. J'ai vu les jardiniers éteindre chaque pousse de branche, la patience que l'on sent dans toutes les créations est une leçon de travail, j'aime le Japon pour tous ces aspects qui me touchent et m'inspirent. J'espère utiliser très vite dans mon travail les feuilles d'or de couleur de Kanazawa !

Dans les Alpes Japonaises j'ai admiré le travail des charpentiers de Gokayama et adoré l'ambiance des onsen de Hirayukan. Partout on retrouve l'inspiration des estampes et des papiers japonais à motifs, le graphisme des feuilles d'arbres, la vapeur d'eau, les couleurs, la mousse... C'est vraiment charmant.

À Naoshima je suis entrée encore dans un autre monde : l'art contemporain et architectural dans un site entièrement dédié, j'avais vraiment hâte de visiter cette île. Je suis peintre en décor et je navigue entre l'artisanat traditionnel de la peinture et de la feuille d'or appliqués à des graphismes plus contemporains. Le Japon est une source incroyable d'inspiration dans mon activité.

La visite très émouvante du mémorial d'Hiroshima était aussi très importante, comprendre ce que le peuple japonais a vécu, la vie d'avant et la blessure qui en découle. Passer une nuit à Miyajima a été le plus magique je crois, rester le soir alors que les touristes sont partis, voir les différentes marées animer le paysage autour du grand Torii, séjourner dans une maison ancienne, je mesure ma chance de pouvoir visiter tout cela.

Et je suis revenue avec grand plaisir à Kyoto, toujours aussi belle et impressionnante, avec toujours des endroits préservés comme la maison Murin-An ou le jardin de bonzaïs. Revoir mon amie Miyako Nishizaki, garder cette amitié de près de 20 ans, se retrouver en France ou Japon, je trouve cela extraordinaire et comme ce voyage m'a donné encore plus envie de découvrir d'autres parties du Japon, je sais que nous nous reverrons.

(Solène ELOY Instagram @solene_eloy)

18年前ヴェルサイユ市と奈良市との交流後、私は日本の田園風景と深いルーツを探りたいと夢見ていました。今年久しぶりに日本に来て、金沢・五箇山・直島・広島・京都を訪れました。以下はその旅の印象です。

金沢では、雄大な木々とその支柱が見事でした。庭師さんたちが枝を一つ一つ丁寧に剪定する様子を見ましたが、彼らの創造的な作業全体に感じられる根気は、仕事の心臓です。こうした日本のあらゆる側面が、私に感動とインスピレーションを与えてくれるのであります。私は近いうちに金沢の金箔を自分の作品に使いたいと思っています。

日本アルプスでは、五箇山の大工さんたちの仕事ぶりに感銘を受け、平湯館温泉の雰囲気に心酔し、至る所でインスピレーションを得ました。版画や模様入りの和紙、木の葉のグラフィックデザイン、水煙、色彩、苔…。本当に魅力的です。

直島は、さらなる別世界でした。完全に独立した土地に現代美術と建築が融合したこの島に訪れるこことを心待ちにしていました。私は装飾画家として、絵画と現代的なグラフィックに応用されている金箔の伝統的な手仕事の間で、試行錯誤しています。日本は私の作品にとって素晴らしいインスピレーションの源です。

広島の記念館への感動的な訪問も、当時の日本人が経験したこと、それ以前の生活、そしてその結果生じた傷痕を理解する上でとても重要でした。宮島での一夜は、このうえなく魔法のような体験でした。観光客が去った後の夕ぐれ時、潮の満ち引きが大鳥居周辺の風景を生き生きとさせるのを目のあたりにして、古民家に泊りました。このすべてを見物できたのは、本当に幸運なことでした。

そして、大きな喜びとともに京都に戻りました。無鄰菴や盆栽庭園といった保存状態の良い場所が常にあって、今も美しく印象的です。友人の西崎美也子さんと再会し、友情が20年近く続いている、フランスや日本で再会しているのは、特別なことと思います。この旅を通して、日本の他の地域をもっと発見したいという気持ちが強くなりました。私たちはきっとまた再会するでしょう。



伝統的な家屋での暮らし

トマ・ムノ

Pour cet article, j'ai choisi de ne pas aborder un thème général lié au tourisme et préféré explorer un sujet plus personnel, que beaucoup de membres de l'Association Franco-Japonaise de Nara connaissent bien : la vie dans les maisons traditionnelles. Ce vécu partagé me semblait être une belle façon de créer une résonance sincère avec nos lecteurs.

Depuis que je vis dans la région d'Uda avec Coline et que nous travaillons ensemble sur le « projet Maison Coco », j'ai eu la chance de visiter de nombreuses maisons traditionnelles. Certaines sont de vrais trésors oubliés. Elles nous invitent à imaginer comment les faire revivre sans trahir leur essence. Je pense à une vieille ferme à Murōshimokasama, dont je garderais l'extérieur intact, tout en intégrant une isolation discrète, une cuisine moderne sous un plafond ancien, et une salle de bain mêlant bois et carrelage, sans jamais défigurer la maison ni son environnement.

Dès que je franchis le portail d'une vieille maison, je ressens quelque chose. Parfois même avant d'y entrer. Et ce sont souvent les maisons de plus de 60 ou 80 ans, avec poutres apparentes et traces de vie passée, qui me passionnent. Je m'imagine la vue depuis leur engawa, les souvenirs ancrés dans leurs murs.

Je passe beaucoup de temps sur les routes du Kansai, et c'est un plaisir. Les paysages japonais, les villages nichés dans les montagnes, tout cela est encore nouveau pour moi. C'est d'ailleurs un manga comme Initial D qui m'a donné l'envie de conduire ici. Et chaque trajet devient une nouvelle découverte, bien loin de ma région Alsace natale.

Si je devais donner un conseil à ceux qui rêvent d'acheter une vieille maison ici : visitez. En vrai. Les photos sont trompeuses. Ce sont les sensations sur place qui font toute la différence. Et c'est exactement pour ça que « Maison Coco » existe.

(Thomas Mounot)

今回の記事では、観光という一般的なテーマではなく、奈良日仏協会の多くの会員のみなさんがよく知っていて、より個人的なテーマ、つまり伝統家屋の暮らしについて、掘り下げるにしました。この体験が共有されるのは、読者のみなさんと心からの共鳴を作りあげるよい方法のように思われます。

コリーヌと共に宇陀地域に住み、「メゾン・ココ・プロジェクト」で共に活動する中で、多くの伝統家屋を訪れる機会に恵まれました。なかには、まさに忘れ去られた宝物のような家屋もあります。それらの家屋は、その本質を損なうことなしに、いかにして再生させるか私たちに想像させてくれます。例えば、室生下笠間にある古い農家を思い浮かべてみましょう。外観はそのままにして、控えめな断熱材、古い天井の下にモダンなキッチン、そして木とタイルを組み合わせた浴室などを取り入れながら、家や周囲の環境を損なわないような工夫をしたいと思っています。

古い家の門をくぐるとすぐに、私は何かを感じます。時には入る前から感じこともあります。そして、私の心をとらえるのは、梁がむき出しで過去の生活の痕跡が残る築60年、80年以上の家々です。縁側からの眺めや、壁に刻まれた思い出が想像されてきます。

関西の道路を走って長い時間を過ごしましたが、それも楽しみでした。日本の風景、山間に佇む集落、すべてが私にとって今なお新鮮です。『頭文字D』(イニシャル・ディー)のような漫画がきっかけで、ここをドライブしたいと思いました。故郷アルザスから遠く離れたところで、毎回走るたびに新たな発見がありました。

もしここで古民家を購入したいと夢見ている人に一つアドバイスをするとしたら、それは実際に訪れてみることです。写真では分かりにくいものです。違いを分からせてくれるるのは、現場での感覚です。そして、まさにそのために「メゾン・ココ」が存在するのです。



APHRODISIA アフロディシア

ピエール・シルヴェストリ

Une joie immense m'étreint puissamment depuis quelques jours. *Aphrodisia* est sorti chez des disquaires français et européens. Il a fallu près de deux années pour créer cet album musical. Il est dédié à une femme et au Japon. Son titre se réfère à une fête organisée en l'honneur d'Aphrodite, déesse grecque de la beauté et de l'amour.

J'ai écrit les paroles des huit chansons du disque lors d'un séjour à Nara en septembre 2023. Un ami compositeur de musique a ensuite travaillé pendant environ un an et demi sur les morceaux et en a assuré le mixage. Un ingénieur du son a fait le mastering des titres au mois de juillet 2025 avant le lancement de la fabrication de l'album au format vinyle et CD.

Le style d'*Aphrodisia* est résolument pop et mêle des sonorités variées : acoustiques (piano, violon), électriques (guitare, basse) et électroniques (synthétiseur). Les textes évoquent le sentiment amoureux pour l'être élu dans ce qu'il a de plus insondable ainsi que mon obsession pour le Pays du Soleil Levant.

Les gens qui me connaissent au Japon savent que je suis passionné de cinéma à travers les séances de ciné-club que j'ai animées et les films que j'ai eu l'occasion de réaliser. En revanche, ils ne sont pas toujours au courant de la place plus qu'importante que la musique occupe dans mon existence. Depuis l'enfance, j'écoute plein d'albums et j'ai commencé à jouer de la guitare électrique à l'adolescence. J'ai fréquenté plusieurs musiciens et compositeurs dès ma période universitaire et cela ne s'est jamais arrêté depuis.

Les images qui illustrent cet article représentent la pochette recto-verso du vinyle ainsi que le visuel du disque compact. Le design est né de la juxtaposition de photographies issus de deux sources différentes : un clip vidéo que j'avais filmé sur un célèbre pont du quartier de Dotonbori à Osaka il y a plus de dix ans, et aussi la retransmission télévisée des astronautes de la mission Apollo 11 foulant le sol lunaire en 1969. Finalement, Aphrodite rejoue Apollon. (Pierre Silvestri)

ここ数日、大きな喜びが私をとらえています。『アフロディシア』が、フランスとヨーロッパのレコード店で発売されたのです。この音楽アルバムの制作に2年近くかかりました。ある女性と日本に捧げられたもので、タイトルは、ギリシアの美と愛の女神アフロディーテを称える祭りに由来します。

アルバムに収録されている8曲の歌詞は、2023年9月に奈良に滞在した時に書きました。作曲家の友人がそのあと約1年半かけて楽曲の制作を行い、それらのミキシングもしてくれました。2025年7月にサウンドエンジニアがタイトルのマスタリングをし、レコードとCDの形式でのアルバムの制作に入りました。

『アフロディシア』のスタイルは、まったくのポップスで、アコースティック（ピアノ、バイオリン）、エレクトリック（ギター、ベース）、エレクトロニック（シンセサイザー）など、様々なサウンドが混ざっています。歌詞は、心の奥深くにある選ばれた存在への深い愛情と、日本への私の愛着を喚起させるものです。

日本の知人は、私が主催していたシネクラブの例会や監督を務めた映画を通して、私が映画に情熱を注いでいることは知っていますが、音楽が私の人生において重要な位置を占めていることはご存じないかもしれません。子供の頃からたくさんのアルバムを聴き、10代の頃からエレキギターを始めました。大学時代から多くのミュージシャンや作曲家と交流してきて、今も続けています。

この記事に掲載されている画像は、レコード盤のアルバムジャケットの裏表とCDの写真です。このデザインは、2つの異なるソースからのフォトグラム（映画フィルムのコマ）を並置することから生まれました。10年以上前に大阪道頓堀の有名な橋で撮影したミュージックビデオと、1969年にアポロ11号の宇宙飛行士が月面に着陸した際のテレビ放送です。さいごに、アフロディーテはアポロに戻ってきます。



隨想「クロード・ランズマン」

角田 茂 (つのだ しげる)

Wer vor der Vergangenheit die Augen verschließt, wird am Ende blind für die Gegenwart.

過去に目を閉ざす者は、結局のところ、現在に対しても盲目となる。

リヒャルト・フォン・ヴァイツゼッカー (Richard von Weizsäcker: 1920-2015)

1985年5月8日、第2次世界大戦敗戦40周年記念、ドイツ連邦共和国大統領演説より

映画『ショア (Shoah)』の監督でも有名なジャーナリスト、クロード・ランズマン (Claude Lanzmann:1925-2018) は、1925年、オーデ＝セーヌ県、ボワ＝コロンブのユダヤ人家庭に生まれた。1943年、クレルモン＝フェラン市のブレーズ・パスカル高校に入学するも、第2次世界大戦の中、18歳でレジスタンス運動に参加する。戦後、彼は高等師範学校で学び、1948年にベルリン大学講師となった。

アンガージュマン (engagement: 社会と関わりを持つこと) を旗印にして、サルトルとボーヴォワールにより月刊雑誌『レ・タン・モデルヌ (現代: Les Temps modernes)』が、ガリマール書店から創刊されたのは、1945年10月である。サルトルによる創刊の辞では、「政治的・社会的事件が起こるたびに、我々の雑誌は一つひとつの場合に応じて立場を明らかにする。政治的にそうするのではない。すなわち、どの政党に仕えるのでもない」と述べている。日本では、1946年1月、吉野源三郎により、岩波書店から月刊雑誌『世界』が創刊された。私はこの雑誌を日本における『レ・タン・モデルヌ』として、学生時代から現在に至るまで愛読し、私自身、アンガージュマンの精神は持ち続けているつもりである。

ランズマンは1952年、『レ・タン・モデルヌ』の編集に加わり、1986年から2018年まで編集長を務めた。彼が企画した『レ・タン・モデルヌ』50周年記念号には、ジャック・デリダやリオネル・ジョスパン等、錚々たるメンバーが寄稿している。残念ながら、2018年、ランズマンが亡くなると、この雑誌は廃刊となつた。

ランズマンを世界的に有名にしたのは、9時間半に及ぶドキュメンタリータッチの映画『ショア』の監督としてであった。ショアとはヘブライ語でホロコースト (ユダヤ人絶滅計画)のことである。映画は被害者としてのユダヤ人生還者、加害者としての元ナチス親衛隊員、さらに収容所近くに住むポーランド人等からの、肉声による、アウシュヴィッツ強制・絶滅収容所についての証言から成り立っている。

今でも私の脳裏に焼きついている場面がある。ガス室で殺される直前の女性たちの髪を切るよう命じられた、ユダヤ人元理髪師ボンバの証言である。自分の故郷の町に住む、親しくしていた理髪師の妻とその妹がやって来た時のことである。「今が人生最後の瞬間だとは、どうしても言えなかった。というのも、後ろにSS (ナチ親衛隊) 隊員が立っていたからだ。一言でも口にしたら最後、死をひかえたこの2人の女性と運命を共にすることになると、はつきりわかっていたからである」、彼は泣きながら証言していた。

パリ留学中であった私は、1984年4月、西ドイツのダッハウ強制収容所を訪れた。ミュンヘン郊外、白樺林の中に建てられたこの収容所は、1933年に設立された、ナチス最古の強制収容所である。設立当初の目的は、ユダヤ人の収容ではなく、反ナチ勢力弾圧が目的であった。ユダヤ人が収容されるようになったのは、1938年以後と言われている。この収容所の博物館を見学していると、外が突然、騒がしくなった。私は右翼のデモかと思って窓から外を見ると、なんと、数百名の中学生が教師に引率され、バスでやって来たのである。ナチスの残虐行為については、ヴィクトール・フランクル著『夜と霧』等で知っていたので、博物館の展示物には驚かなかつたが、私は今起きたこの現実にびっくりさせられた。見学後、館長に会って話を聴くと、なんと義務教育の一環として、ダッハウ強制収容所を見学させているとのことであった。私は最後に、キリスト者として収容所内の教会で、次のような祈りを捧げた。1) 日本にも南京大虐殺をはじめ、アジア・太平洋戦争(十五年戦争)中に、中国、朝鮮、アジア太平洋諸国で行った残虐行為のすべてを展示する博物館が建てられること。2) 中学生が全国から教師に引率され、この博物館を見学にやってくること。3) 日本の青年が、政治家を選び間違えたら死であるという鋭い政治意識を持って、満18歳から国会議員を選ぶ日がやってくること。以上3点である。私は岩波書店発行『世界』の「編集者への手紙」に、この体験を書いて送った。これは戦後ドイツにおける、国家政策としての『過去を心に刻む文化 (Erinnerungs · kultur)』の紹介である。私の書いた「強制収容所で考えたこと」は、1984年7月号に掲載された。

パリ5月革命後、アンガージュマンの使命感に燃えた、フランスの医師とジャーナリストは、1971年、国境なき医師団 (Médecins Sans Frontière) という名称のNGOを立ち上げた。その憲章の冒頭には、「国境なき医師たちは、切迫した危機にある人たち、天災にせよ人災にせよ、災害の犠牲者たち、交戦状態の犠牲者たちに対して、人種的、宗教的、思想的、政治的な、いかなる差別もせず、支援をもたらす」と書いてある。1999年には、28年間の人道援助活動が評価され、ノーベル平和賞が授与された。現在でもなお、ウクライナやガザを始めとし、世界各地の紛争地で、危険を顧みず活躍している。

イタリアの歴史家クローチェ (Benedetto Croce: 1866-1952) は、「すべての歴史は現代史である (Ogni storia è storia contemporanea)」と言った。歴史の本質は、過去を現在の目で見ること、現在の諸問題に照らし、過去を評価することである。我々は、アンガージュマンの精神を持って、今一度、近現代史を深く学び、選挙に行くべきである。

短歌の中のフランス

泉 悅子 (いづみ えつこ)

フランス文化の受容について、戦後 80 年目に、興味深い例を短歌の中に見つけた。現代短歌表現の革新を牽引した前衛短歌のパイオニア塚本邦雄 (1920-2005) の詠んだ「フランス」である。今年 6 月に刊行された『塚本邦雄の百首』(林和清編著、ふらんす堂 2025 年) の本 (右下画像) から、ふたつの短歌を紹介しよう。

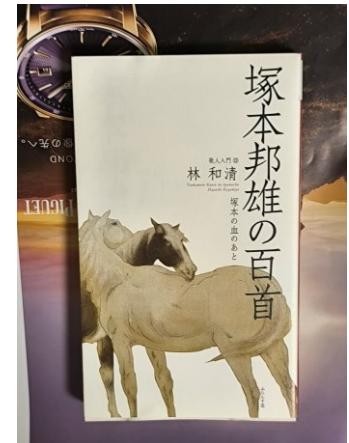
《プレヴェール忌忘るるころに「おゝバルバラ、戦争（いくさ）とは何とおいしいものだ」》『汨羅變』1997 年

《ラ・マルセイエーズ心の國歌とし憐寸（マツチ）の横つぱらのかすりきず》『綠色研究』1965 年

カタカナで書かれた人名や曲名のはらむ世界を思うと、過去の事実も幻想世界のごとく、印象鮮烈にみえてくる。

ジャック・プレヴェール (1900~1977) はフランスの民衆詩人として名高い。彼の作詞した「枯葉」や第二次世界大戦の軍港都市ブレストを書いた「バルバラ」は、シャンソン歌手イブ・モンタンがうたい有名になった。自由を得ながらもいまだ戦争によって何かを喪失したままの日本人。塚本邦雄は、これらの詩を味わいながらも、プレヴェール死後のその何かを見せようとしている。屈折があり、反語にみちた独特な書き方である。且つ美意識を厳格に守ってきている。例えば、俳句で言う「忌日」の登用、「戦争」には「いくさ」のルビをあてる。その中で、フランスの事を大胆に日本の状況に置き換えている。

ふたつ目の歌は「ラ・マルセイエーズ」を「心の國歌」だと断言して「君が代」と対置する。日本人による日本批判として強烈である。だが、この歌は、寺山修司の『マッチ擦るつかのま海に霧ふかし身捨つるほどの祖国はありや』(『空には本』的場書房 1958 年) に呼応した雰囲気のむしろ高踏的な遊びではないか。塚本の「フランス」は、あくまで短歌の表現として、別の世界を現出する材料である。われわれ読者は、小学生のように「アイウエオ」の日本語の音韻でもって、これらの一風変わった短歌のリズムや異国情緒の一首を読み、両国の深刻な過去を振り返り、違う言語を持つフランスの文化をなつかしむ。そして「フランス」に対するイメージは、このようなルートからも戦後の日本人の感性に定着し溶け込んできているのではないだろうか？ とも思う。



ラヴェル生誕 150 周年 ピアノと歌曲

藤村 久美子 (ふじむら くみこ)

「僕はたったひとつ傑作を書いた、《ボレロ》だ。でも残念ながらこの作品には音楽がないんだ。こんな曲はコンサートではやらないだろう！」

ボレロが依頼者であるイダ・ルビンシュタイン夫人のバレエ団によって初演された時、観客は仰天しました。堂々巡りしている音楽につけられた静止したようなこの踊りが理解出来なかつたのです。

しかし、「管弦楽の魔術師」と謳われたその卓越したオーケストレーションは初演するや否や忽ち、世界を駆け巡り、ラヴェルの名を栄光で飾ったのでした。この音響に対する並外れた感覚は数々のピアノ作品にも表れていて、ピアノ曲でありながらオーケストラを彷彿させピアニストの食指を大いにそそるのです。

また、作家、詩人ととの交流が深かったラヴェルは自身も詩作をしました。そして取り上げる詩もたやすく歌にすることが出来るようなものに立ち止まることはなく、もっと叙事的な調子の原作を選んだようです。《博物誌》や《シェエラザード》《五つのギリシャ民謡》など声楽作品に足を踏み入れますと、この作曲家が音楽家であると同時に、作家であり詩人（それもかなり特異な）であったことを感じます。「言葉で表されたことを音符で表したい」と動物の寓話の素描を、未だ見ぬ異国情緒を、独特の音感覚で作品化されているのには驚くばかりです。

ラヴェルにとって詩を音楽にすることは表情豊かな叙唱（レシタティフ）に詩を作り変えることであり言葉の屈折する抑揚を歌唱にまで高め、一つ一つの語がもつあらゆる可能性を抑制するのではなく、高揚することのようです。

この一見風変わりな、だけど限りなく魅力的な作曲家モーリス・ラヴェル。来年 3 月に三野博司先生、林裕美子氏にお力添えをいただき、ボレロだけに留まらない芸術家の魅力をお届けできるようなコンサート（詳細は Mon Nara 通信 12 月号に封入予定のチラシをご覧ください）を開催する予定です。



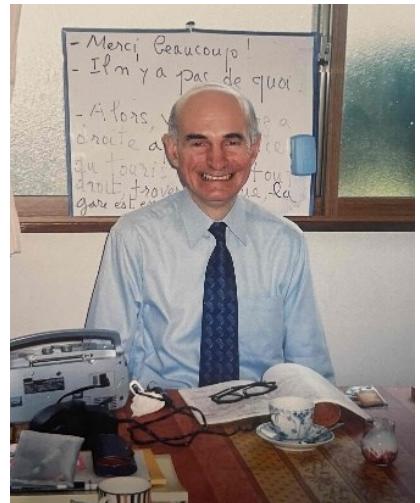
M.ロン(北原道彦・藤村久美子訳)
『ラヴェル 回想のピアノ』
音楽の友社, 1985 年

オリヴィエ・ジャメさんの思い出

井田 真弓（いだ まゆみ）

オリヴィエ・ジャメ先生には、長年、フランス語講座でお世話になっていました。同じクラスの人たちと、さいごまでジャメ先生と共に時間を過ごせたことは、かけがえのない思い出です。先生は持病で体調を崩されていましたが、私たち生徒の前ではいつも朗らかで明るくいらしたので、格調あるフランス語を間近で耳にしながら、ユーモラスなお喋りを交わしていました。お茶目なところがあったり、困っていることがあると、親身になって優しい言葉をかけてくださったり、思慮深くて人間的な魅力にあふれた方でした。

そんなジャメさんが、2023年12月31日に逝去されてから少し時間が経過しましたが、この8月、ジャメさんに手を合わせる場所が奥様のジャメ晴子さんによって建立されました。奈良市の東にある三笠靈園です。9月、浅井直子さんと墓参に行ってきました。眼下に奈良市街、西は生駒山のほうまで見渡せるとても気持のいい場所です。ジャメ先生の笑顔と話し声が蘇ります。



自宅でのレッスンの合間に：後ろのホワイトボードの文字も懐かしいです。

お参りされる方へ：オリヴィエ・ジャメさんの逝去後、複数の会員の方から、お墓ができたらお知らせくださいとの問い合わせが寄せられていました。以下に靈苑の場所をお知らせいたします。

奈良墓地公園「三笠靈苑」 〒630-8202 奈良市川上町623 TEL: 0742-22-2911 / FAX: 0742-23-7171

アクセスの方法は三笠靈苑のHPに掲載されています。靈苑の入り口に駐車場と事務所(9:00~17:00)があり、事務所の空いている時間に行けば、ジャメさんの墓地の場所を教えてもらえます。お供えの花は事務所で購入することができます。線香や蠟燭は不要です。(編集部)

法人会員紹介

野菜ダイニング「菜宴」

<https://potager-rice.com/>

★ 海老三郎マヨネーズ！韓国で発売決定！

2023年に誕生した強烈な海老風味マヨネーズが、この度なんと！韓国企業からオファーがあり韓国内で製造し来年発売する運びとなりました。アフターコロナ、円安、訪日観光客の増加など様々な要因が後押しになりました。これも全て日頃より当店をご利用いただき支えていただいたことが、新商品を開発できる原動力となっており、感謝の言葉しかございません。そして、年明けには新商品の唐辛子マヨネーズをクラウドファンディングにて発売しますので、重ね重ねよろしくお願ひいたします。



当店では、同窓会・2次会・各種宴会なども受けさせていただいております。ご利用金額次第では少人数での貸切も可能です。誰にも邪魔をされず広いお店を貸切れます。その他にも「お荷物の事前お預かり」「花束の手配(別途費用)」などサプライズのお手伝いもお任せください！素敵な思い出作りをサポートいたします。このような機会がございましたら、引き続きよろしくお願ひいたします。

住所：奈良市小西町19 マリアテラスビル2F
Tel : 0742-26-0835 不定期
星 11:00~15:00 (14:30 ラストオーダー)
夜 17:00~22:30 (21:30 ラストオーダー)
店長：久保田耕基



2025年度ガイドクラブ「聖林寺と安倍文殊院を巡る」のご案内

今年度のガイドクラブは11月2日（日）午後に、聖林寺の本田倫子さんの案内で、桜井市の聖林寺と安倍文殊院にお参りします。集合時間・場所、スケジュールは以下のとおりです。

◆集合時間・場所：12:30 桜井駅南口バス乗り場1番に集合。 ◆スケジュール：12:47 談山神社行バスで、12:55 聖林寺到着。聖林寺拝観、マンダラ展見学の後、聖林茶館で、大和抹茶のムースと飲物をいただきます。15時ごろタクシーで安倍文殊院へ移動。安倍文殊院見学。16:40 安倍文殊院バス乗り場に集合。16:52 桜井駅南口行バスで、17:01 桜井駅南口到着。解散。その後、有志による懇親会開催（場所は当日ご案内します）。

◆参加費：会員無料、一般 500円（バス・タクシーベル、拝観料、茶館喫茶代は各自負担。車で直接行かれる方に席の余裕があれば、聖林寺から安倍文殊院までメンバーの同乗をお願いすることができます）

◆問い合わせ&申込先：sugitani@kcn.jp tel. 090-6322-0672（杉谷）

◆案内役の本田倫子（みちこ）さんプロフィール：聖林寺ご住職の妹さん。奈良日仏協会会員。2022年に奈良まほろばソムリエ試験に合格し、奈良まほろばソムリエの会に入会。ガイドグループに所属し、聖林寺・長谷寺・室生寺・大神神社・山辺の道などのガイドを務めている。奈良テレビで夕方放送の「ゆうドキッ！」にも、定期的に出演中。

◆本田さんからのメッセージ：聖林寺では、3年前に新しく改築された御堂で国宝十一面觀音立像を拝観します。昭和26年に国宝制度が出来た際に指定された一体で、天平時代に造られた觀音様を360°Cから拝観できます。また、11月のみ開催のマンダラ展では、當麻寺の4分の1サイズの當麻曼荼羅や春日宮曼荼羅など神仏習合の曼荼羅もお目見えします。安倍文殊院では、鎌倉時代、快慶作の日本最大7mの文殊菩薩像が、四人の騎士を伴う「渡海文殊群像」のお姿で拝観できます。その他、平安時代の陰陽師 安倍晴明の出生の地や国の特別史跡になっている文殊院西古墳へ参ります。

秋の清々しい一日を、神仏と共に過ごしませんか。



《2025年度第4回理事会報告》…事務局

日時：2025年9月18日（木）15:00～16:20。場所：野菜ダイニング「菜宴」。出席者：三野、浅井、高松、菌田、杉谷、中辻、喜多、三木。議題1. 会員数確認。議題2. 7/17 理事会後の活動：(9/7) 第157回フランス・アラカルト「フランス詩に泳ぐ魚たち」。議題3. 今後の行事：(11/2) 2025年度ガイドクラブ「聖林寺と安倍文殊院を巡る」案内役本田倫子、(11/23) 秋の教養講座「ベルサイユと私」講師西崎美也子、(2/11) 2025年度総会「菜宴」にて。議題4. 来年度役員。議題5. Mon Nara 通信 No.22、Mon Nara No.309 10/16 発送予定。議題5. その他：ホームページのフランス語頁。次回理事会 11月20日（木）15:00～16:30「菜宴」にて。



編集後記 ☆日本でも海外でも春から秋にかけて、玄関先に鉢植えや地植えのゼラニウム (geranium) の花が咲いている家を見かけます。ヨーロッパの各地で、横一列に並んだ鉢植えのゼラニウムが窓辺に飾られている家をみると、花が建築と一体化しているようで、住む人が水やりをする姿が想像されます。この植物は、17世紀に南アフリカからヨーロッパにもたらされ、様々な色や品種の花がありますが、個人的には真紅の花に魅かれます。☆日本名「天竺葵（テンジクアオイ）」は、江戸時代に外国からもたらされ、葉の形が「葵」に似ていることに由来するそうです。遠い異国之地を「天竺（インド）」と表現していたのは興味深いですが、和訛の「天竺」や「葵」の語にどこかリスペクトが感じられ、江戸時代の人は異国情緒をかき立てられながら花や葉を愛でていたことでしょう。☆品種改良や交配が重ねられ、様々な土地に根付いて、人々の生活に彩りを添えてきたゼラニウム。その旺盛な生命力と変幻自在の可憐さが愛される所以でしょうか。（N. Asai）

- ◆当協会では**会員を募集**しております。お申込み、お問合せは下記事務局まで。
- ◆本誌への投稿、特に新鮮で多様な話題、直近のフランス情報などを歓迎します。誌面の都合でご相談のうえ、表現を変えさせていただくことがあります。Mon Nara 2026年2月号は**1月30日**が原稿締切日です。
- ◆会員のみなさま**「Mon Nara」（2月、6月、10月発行）又は「Mon Nara 通信」（4月、8月、12月発行）にチラシ同封を希望される方は**、1) 内容がフランスに関わるもの、2) 本人または代理人が発送作業に参加、の二つの条件を満たせば同封可能ですので、下記事務局までお問い合わせ下さい。

Mon Nara 2025年10月号 numéro 309
奈良日仏協会 Association Franco-Japonaise de Nara

HP : <http://www.afjn.jp> E-mail : nara.afj@gmail.com FAX : 0742-62-1741
〒630-8226 奈良市小西町19 マリアテラスビル 2F 野菜ダイニング菜宴[郵便物のみ] 発行責任者：三野博司